〔類聚大補任　順德〕承久三年

齋宮熙子內親王　四月廿日讓位、（中略）八月廿一御歸京、鈴鹿道　葦代輿、以力者法師仕之、

〔秋の夜の長物語〕山伏、こしよりおりて、（中略）此こしにめし候へとて、ちごとわらはをかきのせて、りきしや十二人、鳥のとぶがごとくに行けり、

〔吾妻鏡　三十二〕嘉禎四年（曆仁元年）二月十七日癸巳、子刻御入洛、（藤原頼經）著于六波羅御所（卅間新造）給、（中略）

御輿（被上御簾、御裝束御布衣、御力者三手、）

〔吾妻鏡　三十四〕仁治二年十一月四日丁亥、今朝將軍家（藤原頼經）爲武藏野開發御方違、渡御于秋田城介義景武藏國鶴見別莊、御布衣、御輿、御力者三手供奉、著水干、

〔臨幸私記〕觀應元年八月齋罷

本新兩院、（光明、崇光）同幸本寺、（天龍寺、中略）還幸之次、至雲居庵、又有法譚、不設御座、假坐亭上、

原夫佛法流通我朝已來、迨于七百餘載、三百年來、佛法日衰、似沙門形而非沙門者多矣、（田樂法師、力者法師等是、）

間有貴曹高僧敎座大德、其威儀亦弊、

〔和久良半の御法〕爰かしこより、女中抔の御聽聞所へ入せ給ふ輿車どもきしろいつゝ、路頭さながら市の如し、何れもそめきりたる下簾、土をはくまで、牛飼は新車に强牛をかけ、力者はいろいろに足をふみて輿をかく、

〔臥雲日件錄〕文安四年正月八日、凡當院主年始始出時、力者八人而輿、雖大路廣衢、而亦后四力各成列而行之、則殆乎塞路半邊、行路之間、老者、弱者、荷者、行步遲疑、則諸力肘而脅之、嚇而畏之、予住等持相國之時、深誡之、又未嘗輿過六力也、蓋東西山諸高宿入城者、雖遠路而二力三力而已、多者亦不過四力也、但現住不在此限、予遷當院以來、亦未八力而輿、何必年始獨然哉、舊例八力內、當住六力、亦當如本、唯除號御分者三人可也、